

生命の優雅なる罪と高貴なる過ち—三島由紀夫『春の雪』を読んで—

上海交通大学 安泰経済・管理学院 邱舒怡



実際、本当に『豊饒の海』四部作を通して読んだのは一度だけですが、第一部『春の雪』は何度も読んでいます。というのは、物語のその後の展開を知ってから、一回また一回と生死が巡って通り過ぎる、こうした悲劇の直接的な読後感、かえって『春の雪』のわずかな言葉から覗く、もの悲しさの痕跡のような、隠れた憂いと悲しみの気持ちから来る優美さに及ばないと感じるからです。

これは「春の雪」という日本文学の「もののあはれ」の特色を強く帯びた見出しからも見て取れます。春は花、秋は月、夏は雨、冬は雪こそ四季の移ろいに合った「風物」です。雪と春はそもそも相容れないもので、ゆえにそれ自体が、起きてはならないことが起きてしまったときの、光を当てるわけにいかない愛の物語を示しているのです。ちょうど主人公の松枝清顕が言っているように、ふたりの愛は結局のところ「終わり」を考えないところから始まるのか、それとも「終わり」を考えるとところからやっと始まるのかということです。春の雪は、まさに清顕と聡子の自ら滅んでいく愛であり、タイトルから繊細な悲壮感が透けて見えます。弱小な体で打ち勝ちようのない強引な押しつけや権力に対抗する唯一の方法は、こっそりと冬と春の境を迎え、一瞬のうちに解けてしまうことで季節に支配されない自由を示すこと。ちょうど作中の清顕と聡子のように、聡子が皇族と婚約してから互いに心のうちを明かして愛欲の河へ落ちる決意をしています。私通する不潔さや下品さはかけらもなく、生命が幾重もの束縛を突き破って一線を踏み越える優雅な姿を見せています。これこそが清顕の感じ取った「優雅というものは禁を犯すものだ」という感覚なのでしょう。そして禁を犯し常軌を逸した行為をなしたその刹那、恋も清顕と聡子も人の世からほどなく去る宿命を背負い、だからこそ最後に、この平安時代の雅さを持つふたりは、片や剃髪して尼となり仏門に入って、片や早々に若くして世を去ってしまったのです。

これこそが、美に人の心を打つ力があるのは消失と死が影のように寄り添っているからという三島流の美学の理念でしょう。あたかも蜷川実花の映画『さくらん』の中で花街の入り口に置かれた金魚鉢の金魚のようです。美しいけれど、いったん飛び出せば死ぬしかないのです。三島は美と「生」の描く境界から踏み出すことで消え去るさまを結びつけた描写に慣れていますが、それもこうした美が悲壮感を帯びており、最終的に消えてなくなることも美しさをまとっているからでしょう。それは彼の最も有名な作品『金閣寺』から見て取れます。金閣には人の心を奪う美しさがありますが、最後に大火で焼き払われたときの「完璧」から「壊滅」へ至るなまめかしさと残忍さを帯びた美感だけが文学史上に力強い一筆を残しているのです。

こうした美学の理念は日本文学の歴史上で脈々と受け継がれていると言えます。平安時代の偉大な作品『源氏物語』の中で、光る源氏の君はあちこちで妙齡の少女、ひいては人妻とまで密通しています。愛情の虚無とつかみどころのなさが一回また一回と礼儀作法の垣根を越える中に、人の心の琴線を捉えて放さない美感が現れるのです。そして『春の雪』では、清顕は初め聡子が好意を示しているのに優柔不断で、その愛情を受け入れる勇気がありませんでしたが、聡子が洞院宮と婚約してやっと自分の聡子への愛に気づき振り返ります。運命と気持ちの無常は『椿姫』と比べうるすれ違いや過ちをもたらし、まさにこうしたもつれ合いと苦痛のせいで、婚約中の彼らの密会が手に汗を握るものとなっています。まさに題名の言うとおり、愛情のために身の危険をも顧みない、優雅なる罪と高貴なる過ちなのです。

清顕は間違いなくこうした行為をする気質で満たされています。彼は繊細、敏感で、やや疑い深いところまであり、よくいろいろな夢を見ている。自分の「夢日記」をつけており、彼が自分の死亡した後に魂が棺桶の上を漂ってで自分の死んでしまった肉体を高い所から見下すと空想さえて……三島由紀夫は後期の作品で狂ったように肉体美と雄々しい壮健な風格を求めて続けていますが、それも彼が身体を鍛え続けており、非常に侵略力のある美しい写真集『薔薇刑』を残しているためですが、そうした作者も最後の作品では清顕のような優柔不断で少年っぽさに満ちた男性のイメージを作りだしています。思うに、彼は清顕のような役回りに自分のもう一つの感情豊かで繊細な人格を託して、人物にそうした人格を付与すると同時に、清顕の常軌を逸した行為によって自分がそのとき遂げられなかった越境を果たしたのかもしれない。続く『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』も同じ

道理で、例えば『奔馬』では紅日を目の前に切腹する勲少年を描いていますが、現実には『天人五衰』を書き終えた後、三島本人も勲と同じ急進的な行為に走りました。彼は何度も生まれ変わっては境界を越え死んでしまう「清顕」を通して、実際の生活では誰も出来ない「罪」と「過ち」が含む残忍な美しさを解釈しているのです。

これでシリーズ全体の名前、『豊饒の海』を振り返ることができます。この「海」については多くの人がさまざまな解釈をしており、人の豊富な感情だとする考えもありますが、三島由紀夫がこの四冊の中で物語といざこざを通して述べてようとしたような、生死が巡る東方の哲学観から見ると、「海」は「生命」の象徴だという考えのほうが合理的です。手がかりとして存在する本多の目の中で、清顕は四冊の中で別々の身分として存在し、永遠に二十歳足らずの若い生命としてこの世の中をさまよいつつ突破できずにいます。彼は死のたびに一度の命を終え、禁忌を犯すことを通じて生存の実感を獲得し、それまで体得できなかった青春の活力を獲得するとほどなく「死亡」の形で消えてしまいますが、彼はこの世、すなわち「生」の「海」を逃れられていません。彼と比べると、聡子は恋をどうしても終わらせざるを得ない最後に、俗世からの死を選び、尼となって、しかもシリーズの最後には清顕の存在を否定し、本多の抱いてきた 60 年余りの夢を粉碎しています。彼女が象徴しているのは生きながら死すという生命の包囲の突破で、俗世からの死を代償として輪廻を離脱した存在です（清顕の四度の「転生」と対照）。

三島由紀夫の美学の観念はこの本の中で型にはまらず上品で繊細な風格に現れ出ていますが、変わらないのは彼が文字の中でずっと探し求め続けた人生の優雅なる罪と高貴なる過ちなのです。

読んだ本について：

『春の雪』【日】三島由紀夫(著) 【中】唐月梅(訳) 上海訳文出版社

参考文献：

(1)『不思議な鬼才—三島由紀夫』【中】唐月梅(著) 九州出版社

(2)『*The Life and Death of Yukio Mishima*』【英】ヘンリー・スコット・ストークス(著) 上海書店出版社

(3)『生と死の弁証法：〈潮騒〉と〈春の雪〉の創作理念の相違点と共通点の議論』高瑞怡 雲南大学人文学院
